紀元前7世紀における西アジアの馬面

Near Eastern Frontlets of 7th Century B. C.

巽 善 信^{*}
TATSUMI Yoshinobu

ABSTRACT The Near Eastern frontlets (horse forehead ornaments) of 9th-8th centuries B.C. have subtriangular shapes in which the upper parts are wide, the lower parts are narrow and are broad in general. But in the 7th century B.C., the shapes changed completely to the slender ones. The contrastive difference is obvious, and the change isn't natural. In the Near Eastern world of the 7th century B.C., armaments were reinforced to cope with Scythian invasions. So it is possible to say that the change happened by a strong agency, namely the shifting from chariot-battles to cavalry-battles. However, it isn't a functional change for defense. Because those of the 7th century B.C. are too narrow to protect horse heads. The Powers, Assyria, Urartu, and so on, instantly introduced the cavalry in the Scythian style. Therefore the author considers they imitated the Scythian frontlets then. It is possible that Scythians used the wooden or leather frontlets in the 7th century B.C. which don't remain now. In fact, the Near Eastern frontlets of the 7th century B.C. bear a strong resemblance to the Scythian ones of 4th century B.C. in shape. The author focuses on one type of frontlets which have one overhang on either side. In the Near East, this type was made only in the 7th century B. C., and we can't find the prototype. But some Scythian ones have the same overhangs. It is possible that the Scythians used the originals of this type.

はじめに

西アジアの馬面が、前7世紀頃にそれまでのものとは、形態的に異なったも

* 天理参考館学芸員

Curator, Tenri University Sankokan Museum

の⁽¹⁾に変化することは、すでに指摘したとおりである。本稿ではその形態変化を引き起こした要因に迫ってみたい。Ⅰでまず西アジアの馬面形態を再度分類し、Ⅱにおいては西アジアの関連があらうと考えられる、北アジアに見られる馬面の形態の特徴を促え、Ⅲで西と北の両アジアにおける馬面の比較検討を行い、前7世紀頃における形態変化の原因を考察することにする。

I. 西アジアの例

実物あるいは馬像に表現されている馬面の形態を観察すると、幾つかに分類できる。⁽²⁾まず前9～8世紀頃の馬面を簡単に紹介し、その特徴を記す。

上部が左右に張り出た逆台形

青銅製。両サイドが外に反り、1～3本の稜線が打ち出しで外縁部に廻らされている。神像や牡牛などの獣像、植物紋等が毛彫りや打ち出しで描かれている。長さは25cm程度で、上端部に3つ、下端部に3つ以内の小孔が穿たれ、一部にリングが残っている。本来はすべての孔に備わっていて、そのリングを通して面繫に取り付けられていたと考えられる。この形態の馬面はウトルトウの遺物にしか確認されていない。公表されているのは管見で7点⁽³⁾あるが、いずれも発掘出土例ではない。したがって、年代が分かるのはウラルトゥ王イシュプイニ（前830～810年頃）の名が刻まれた1点のみである。

T字形（図1-1参照）

青銅製。上半部が大きく左右に張り出したT字形をなす。上半部は中央部で一旦くびれ、上下に分かれている。その上部の四端は丸みを持つが、下部の両端は角張っている。輪郭に添って2本の稜線を、打ち出しで外縁部に廻らせている。なかにはテイシェバ神が丹念に毛彫されているものもある。長さは30cm程度。面繫に取り付けるために、上端部に3つ、角張った張出し下部の両端に1つずつ、下端部中央に1つ、小孔を穿いている。この形態の馬面もウラルトゥの遺物にしか確認されていない。銘文が刻まれていて、年代が分かるのが7点ある。その内ウラルトゥ王メヌア（前810～785年頃）の名が見られるのが3点、同王サルドゥルⅡ世（前760～730年頃）の名が見られるのが4点である。

逆台形

主に青銅製であるが、象牙製のものもある。上底が長く、下底が短い逆台形

図1 前9～8世紀の馬面

1 バイブルランド博物館蔵資料

2 ニムルド出土例

をなす。女神や動物などが浮彫風に描かれている。面繫に装着するための小孔が、上下端に穿たれている。青銅製のものはテルタイナト（前8世紀末）、ゴルディオン（前8世紀末）、ミレトス（前8世紀）から出土していて、象牙製のものはアッシリアのニムルド（前9世紀末～8世紀）から出土している（図1—2）。したがって前8世紀頃に年代付けられる。

台形

ハッサンルⅣB層より台形をなした青銅製馬面⁽⁴⁾が2点出土している。そのうち1点は上端部は欠失しているが、下端部には5つ、両側中央部には1つずつの小孔が穿たれている。もう1点は下端部には連なった小孔が穿たれているが、上端部には輪状に折り返した吊手を取り付けられている。年代は前9世紀。

以上、前9～8世紀頃の馬面の基本形態を紹介した。ウラルトゥでは盛んに用いられていたのに対し、大国であったアッシリアにはその形跡がほとんど認められない。唯一実物例である、ニムルド出土の象牙製馬面も北シリアからの戦利品である可能性はある。当時、両国は相拮抗し、対立関係にあったが、馬面におけるこの対照的な相違は興味深い。馬面自体が当時の西アジアではそれほど一般的ではなかったということであろうか。形態的には台形を基本としたものが多く、概して幅は比較的広い。小孔の位置が上下端に限定されているものと、さらに左右両側にも穿たれているものとに分かれる。当然、異なる装着

方法があったことを示す。しかし、すでに述べたように前7世紀頃になると形態に変化が起きる。以下に具体例を示し、その特徴をつかむことにする。

(a)イラン、ババジャン出土例(図2—1)⁽⁵⁾ 馬葬墓。青銅製。裾で外反りながら大きく広がる近似台形をなす。面繫に取り付けるために狭い上端部には2つ、両端の中央部には左右2つずつ小孔が穿たれている。弧を描く下端部にも輪郭に沿って17つ小孔がみられる。長さ 25.3cm。前7世紀。

(b)キプロス、サラミス2号墓出土例⁽⁶⁾ 墓道で1両の戦車と2頭の馬が確認され、その頭部より青銅製馬面が1点ずつ、計2点(no. 48 と no. 51)出土している。細長い長方形を基本とした形態をなす。上下2つの部分からなり、蝶番でつながっている。上部の上端部は輪状に折り返され、上部中央部にはパピルス紋、下部にはロータス紋、下端部にはパルメット紋を打ち出している。2点とも長さ 46cm。キプロス古拙期Ⅰ期の初頭に年代付けられている。

(c)キプロス、サラミス3号墓出土例(図2—4) 墓道で2両の戦車と4頭の馬が確認されたが、そのうち保存状況の良い2頭の頭部から青銅製馬面が1点ずつ、計2点(no. 21 と no. 116&117)出土している。形態、構造は(b)とほぼ同様であるが、下部に透紋が見られる点が異なる。また no. 116&117 の上部には嘴状の突起装飾が見られる。長さは 55cm (no. 21), 48cm (no. 116&117)。キプロス古拙期Ⅰ期の末から同Ⅱ期の初頭に年代付けられている。

(d)キプロス、サラミス47号墓出土例(図2—5, 6, 7) 47号墓は合葬墓で、8点の馬面が出土している。軛でつながられた2頭1対の馬が4対、墓道で確認された。そのうち最初の埋葬に関連する1対の頭部から、細長い楕円形を呈した金製馬面2点(no. 82 と no. 85)が出土した。金製と言っても薄く、しかも周辺部は折り返されていることから、別の材質でできた本体に張り合わされていたものと考えられる。報告書では皮革製ではないかとしている。長さ 41.5cm (no. 82), 37cm (no. 85)。追葬と関連する3対の頭部から青銅製が4点(no. 81&119, no. 111, no. 114, no. 117)、象牙製が2点(no. 89 と no. 92)、計6点の馬面が出土している。青銅製馬面の形態、構造そして文様は(b)とほぼ同様である。長さは 45cm (no. 81&119), 44cm (no. 111), 45.5 cm (no. 114), 45cm (no. 117)。最初の埋葬年代はキプロス古拙期Ⅰ期初頭、追葬が行われたのは同期中頃と考えられている。

(e)キプロス、サラミス79号墓出土例 墓道から出土した4頭だてのB戦車の

図2 前7世紀の馬面(縮尺 1/6)

- 1 ババジャン出土例 2 天理参考館蔵資料 (38-451) 3 アダナ博物館蔵資料
 4 サラミス3号墓出土 no. 116 & 117馬面 5 サラミス47号墓出土 no. 85 馬面
 6 サラミス47号墓出土 no. 114 馬面 7 サラミス47号墓出土 no. 117 馬面

馬に青銅製馬面が1点ずつ取り付けられていた。形態、構造は(c)の青銅製馬面 no. 116&117 と同様である。上部には獅子紋、下部には人物紋を高浮彫風に打ち出している。キプロス古拙期Ⅰ期に年代付けられている。

(f)天理参考館蔵資料(図2—2)⁽⁷⁾ 青銅製。3点。伝イラン、ルリスタン地方出土。上部で左右に張り出し、逆に中央では一旦狭まり、裾で外反りながら広がっている。上端部の突き出し部分を裏に折り返して輪状とし、左右の張出し部分の下に1つずつ、弧を描く下端部には連ねて小孔を穿っている。中央部は带状に打ち出している。長さは 23.2cm (登録番号38-450), 22.9cm (登録番号38-451), 24.1cm (登録番号38-452)。

(g)アダナ博物館蔵資料(図2—3)⁽⁸⁾ 青銅製。(f)と同様の形態をなす。ヴァン湖周辺出土とされている。長さ 20.2cm。

(h)アシュモレーアン博物館蔵資料⁽⁹⁾ 青銅製。2点。イラン出土としか記述されていない。(a)と同様、裾で外反りながら大きく広がる近似台形をなす。上端部に2つ、両端の中央部には左右1つずつ、弧を描く下端部には連ねて小孔を穿っている。(f)、(g)と同様に中央部は带状に打ち出している。長さは 21.2 cm (登録番号1965-855), 23.5cm (登録番号1965-856)。

(i)テヘラン国立考古博物館蔵資料⁽¹⁰⁾ 銀製。ジヴィエより出土。下半部しか残っていないが、ほぼ台形に近い形態をなしている。中央にはバルメット紋が打ち出され、その下には2匹の向き合った牛像、横には立ち上がった獣像を線彫している。左右両側に1つずつ、下端部には連ねて小孔が穿たれている。現長 13cm。R. ギルシュマンは前7世紀末頃に年代付けている。

(j)銀製馬面⁽¹¹⁾ 個人蔵。1点。東アナトリア出土と伝えられている。細長い台形を基本とした形態で、上部は丸く、下部は外反りながら広がっている。中央部は带状に打ち出している。上端部には別に作った輪を鋳留し、左右の両側中央部には1つずつ、下端部には15個の小孔を連ねて穿っている。

実物以外では、像やレリーフに描かれているものが参考となる。トルコの東部にあるウラルトゥの遺跡、アルトゥンテペの3号墓より出土した青銅製馬頭像に細長い台形の馬面が描かれている。その描写によると、額革を上端部に、鼻勒を両側につなげ、下端部には房飾を取り付けている。したがって(a)、(f)～(j)の下端部に見られる連なった小孔は房飾を取り付けるために穿たれたものと考えられる。伴出した青銅器に刻まれていた王名より、墓主はアルギシュティ

図3 アッシュールバニパル期のレリーフ

Ⅱ世（前714～685年頃）と同時代の人物と考えられている。アッシリアレリーフにも前7世紀にはいると、ようやくそれらしきものが見られるようになる。⁽¹³⁾ 現在ベルリン国立博物館に所蔵されている、ニネヴェのアッシュールバニパル（前669—627年）宮殿から出土したレリーフ破片に、細長い逆台形をなした馬面と思われるものが描かれている。また同じくアッシュールバニパル宮殿レリーフに描かれている帝王騎馬像には、馬の額部から鼻梁部にかけての位置に馬面らしきものが表現されている（図3）。しかし、これら騎馬表現はすべて横向き⁽¹⁴⁾の描写で、はたして馬面と呼べるものかどうかは判断しにくい。上部から下部へと次第に厚く表現されていることから、V. セヴィンは織物でできた房飾りではないかとしている。

以上前7世紀頃に年代付けられる馬面を紹介した。これらは細長い形態をなしている点で共通している。概して細く、特に上端部は極端に狭い。それまでの形態から判断して自然な変化とは考えにくい。ウラルト³域やルリスタン域からは、長さは25cm程度で、裾で広がった細長い台形を基本とした形態をなす馬面が出土している。ハッサンル出土例がその先行形態とみることも可能だが、相違点も認められる。ハッサンル出土例が全体に幅のある台形をなしているのに対し、これら前7世紀に位置付けられるものは上端部が極端に狭く、逆に下半部が外反りながら大きく広き、下端部は弧を描いている。また下端部に連ねて穿たれた多数の小孔はさらに房飾りを取り付けるためのものと考えられており、装着方法にも若干の違いがあるようだ。少なくともハッサンル出土例

よりこれらの年代を前9世紀まで遡ばせる必要はないと考える。一方、キプロス出土の馬面は長さが45cm程度と長く、細長い長方形を基本とした形態をしている。

II. 北アジアの例

筆者が資料として提供できるものは少ないのだが、おおまかな特徴はつかむ⁽¹⁵⁾にはさしあたり十分と考えられる。以下に示す。

(a)黒海北岸ソロハ古墳に近いツィンバルカ古墳から2点の金製馬面が出土している。そのうちの1点(図4—1)

は上端部が上と左右に、中央部が左右に張りでた細長い方形をなし、下部はわずかに裾が広がっている。女神アビが絡んだ双龍に立ち、グリフィンを押さえている。長さ41.4cm。もう1点も形態は前者とほぼ同じであるが、上端部の張り出し部分がない。上部には2匹のグリフィンをそれぞれをさえる人物、その下には翼が表現されている。長さは図版より判断して、前者とほぼ同じ程度である。このほかに銀製馬面が4点出土しているようだが、詳細は不明。ツィンバルカ古墳は前4世紀末に年代付けられている。

図4 スキタイの馬面

(b)アゾフ海北岸、ベルジャンスク古墳から金製動物闘争紋馬面(図4—2)が出土している。上部がやや幅広く、中央部が三角形状に張り出た細長い方形をなす。鹿を襲うグリフィンを鹿に噛みつくライオンが型押しで描かれている。長さ42.8cm。前4世紀。

(c)ウクライナの森林草原地帯に位置するヴォルコフツィ村古墳群から金製馬面が2点出土している。1点は長方形を基本とした形態で、下半部がさらに細く狭まっている。上半部にはギリシア神話のゴルゴン、下半部には有翼の2匹のグリフィンを配している。長さは図より判断して約20cm。もう1点は魚

の形をなし、眼、口、鱗などの編部を型押しで表現している。長さ 28.4cm。最大幅 4.5cm。前 4 世紀。

(d)黒海北岸、ドニエプル下流にあるソロハ古墳より金製馬面（図 4—3）が出土している。二匹の魚の合わせた形態をなす。長さ 38.8cm。前 5 世紀末～前 4 世紀初頭。

(e)アルタイ地方のトゥエクタ第 2 号墳より木製双猛禽紋馬面が出土している。円形をなし、二羽の鷹グリフオンを描いている。径 12.7cm。前 5 世紀。

(f)アルタイ地方のパジリク第 1 号墳から頭部に立飾りを挿し込んだ馬頭飾が出土している。立飾りに 1 点は鹿角（図 5—1）を、もう 1 点はグリフオン（図 5—2）を装着している。いずれも皮革、フェルト、銅そして金箔でできたもので、馬の額部から鼻梁部にかけての部分と頬を被う部分があり、馬面形態をなす。馬面部分が上部で左右に舌上に張り出している点が興味深い。さらに木製馬面が 3 種類出土している。すなわち円形で中央部は半球形状の浮き彫りと

1

2

図 5 パジリク出土馬頭飾

なっているもの3点、半月形状をなすもの1点、そして逆三角形で上半部の輪郭が丸い、いわゆる水滴状の形態をなし、中央部が輪郭に添って浮き彫りされているものが1点である。水滴状の馬面には金箔が張られている。大きさは不明だが、図版より判断していずれも10～15cm程度である。前5～4世紀。

(g)同じくパジリクの第2号墳より立飾りを挿し込んだ馬頭飾と角製動物闘争紋馬面、そして木製円形馬面2点が出土している。馬頭飾は頭部上半部と頸部を被うもので、立飾りは山羊の頭部とその上にのる鳥からなる。角製馬面は2羽の鳥を食わえた有角の豹を象っている。長さ20.6cm。前5～4世紀。

(h)パジリク第3号墳からは第1号墳出土例とは異なる種類の木製馬面が出土している。半月形ではあるが両端が丸く、いわゆるブーメランの形態に似ている。この種の馬面は3号墳からだけでも3点出土しており、大きさは15cm程度である。前5～4世紀。

北アジアから出土している馬面を概観した。これら北アジアの出土例の多くは儀礼用と考えられ、どの程度のものであつたかは不明であるが、全く実用していないものが儀礼にのみ用いられるというのも考えにくい。もっと機能的なものではあろうが、これに類似した形態で、皮革製か木製の馬面が用いられていたと考える。西アジアでは台形など輪郭が幾何学的なものばかりであったが、北アジアではたとえば魚の外形を象るなど、象形的なものも多く存在する。またドニエプル河流域アレクサンドロポル古墳とチミュレバ・モギラ古墳⁽¹⁶⁾から立体的獣頭の立飾りをつけた、馬面とされている金製品が出土しており、パジリク出土の馬頭飾と構造的に類似するものと考えられている。広大な地域であるが北アジア一帯に類似した文化があつたことが改めて理解できる。しかしながら南ロシア地域とアルタイ地域とは若干の差異も見られる。木や皮革は腐り、現存する資料がどれほど当時の状況を復元できるのかという問題もあるが、とりあえず形態分類してみる。南ロシア地域では魚を象った象形タイプと長方形を基本とした非象形タイプに大別できる。両方とも細長い点では一致する。(a)、(b)、(d)の馬面はその大きさ、形態から判断して、明らかに額部から鼻梁部にかけての部分に装着されたものである。一方、アルタイ地域のものも南ロシア地域と同様に(g)の角製動物闘争紋馬面のような象形タイプと非象形タイプとに大別できるのだが、次の点で異なる。まず大きさが大小、様々である。次に非象形タイプが円形や半月形などその形態が豊富である。大型で、

長方形を基本とした細長いものが多いスキタイのものとは対照的である。興味深いのは(a), (b)の馬面である。ともに中央部のやや上に三角形の張り出し部分を持っているが、パジリク第1号墳出土の馬頭飾も馬面部分が上部で左右に舌上に張り出しており、共通するものである。これは両眼の上にあたる位置になり、馬の顔部に合わせた、自然な形態であると言える。パジリクの馬頭飾に見られるような馬面がまずあり、それを祖形として形態的に様式化したのが南ロシア地域の非象形タイプと考えたい。

III. 考 察

前7世紀頃に何かが作用して西アジアの馬面に形態変化が起きたと考えられる。前7世紀頃というのは、記録によると黒海周辺に勢力を持っていたスキタイを中心とする遊牧騎馬民族が西アジアに接触し、活躍した時代である。ヘロドトスは『歴史』第4巻で次のように述べている。「スキュタイ人ははじめアジアの遊牧民であったが、マッサゲタイ人に攻め悩まされた結果、アラクセス河を渡りキンメル⁽¹⁷⁾リア地方に移ったという。」追われたキンメル人、引き続きスキタイ人が西アジアに現れ、大国を脅かしていたことが知られている。アッシリアの記録によると、アッシリアの王子センナケリブは、ウラルトゥの王ルサルⅠ世（前730—714年頃）がキンメル人のために手ひどい打撃をこうむったことを王サルゴンⅡ世（前722—705年）に報告している。しかしその後、対アッシリア戦略で一致した両国は同盟を結んでいる。一方スキタイも前7世紀にアッシリアに侵略し、諸州を略奪している。防ぎ切れなかったのかアッシリアは王アサルハaddon（前681—669年）が娘をスキタイの王パルタトゥアに与えるなど、同盟関係を結ぶことにやっきとなった。またスキタイはウラルトゥにも攻め入り、現在アルメニア共和国にある城塞都市カルミルブルールを破壊している。

ならば西アジアにおける馬面の形態変化をスキタイとの接触の影響ととらえられないであろうか。これら遊牧民族は西アジアの鉄器文明を素早くとり入れ、使いなれた馬を用いて騎兵隊を独自に考案した。この騎馬隊を迎え撃つアッシリアやウラルトゥは旧態の戦車隊と歩兵隊を主体としたものであった。騎兵がなかったわけではないが、城塞都市を落とすには必ずしも騎馬戦は有効ではなかったであろう。しかし、この戦術はスキタイのゲリラ的な攻撃には対処し

きれなかった。攻め込めば去り、追っても攻略すべき拠点もなく、まったくと
らえどころのない敵である。たとえスキタイが奪った地域に長く留まることが
なかったとしても、破壊されることには変わらない。西アジアの諸国はこの現
実に目をそむけるわけには行かない。競うようにこの新たな戦闘形態に即応す
るような軍隊に再編成しようとしたに違いない。⁽¹⁸⁾ I. メドヴェドスカヤ氏は西
アジアにおける前7世紀の馬面の形態変化をこの戦争形態の変化の結果ととら
えている。⁽¹⁹⁾ 筆者もその意見には賛同する者ではあるが、彼女の説明にいささか
の疑問が残ることも付けたしたい。戦車の場合、常時盾を持った歩兵が馬の左
右に控え、馬を初め戦車への攻撃の防御にあたるが、騎兵隊ではむしろ従者は
不必要となるため、馬のための防具が必要になり、馬面も機能的なものに変化
した、と彼女は考えた。しかし、それほど機能的にとらえることに筆者はやや
抵抗を感じるのである。馬冑と言うならば理解もできるが、馬面に防具として
どれほどの効果があるのか疑問である。⁽²⁰⁾ 筆者は重装備とも言える戦車・歩兵軍
を主力とする西アジアの軍がスキタイの軽装騎馬軍に好いようにあしらわれた
というショッキングな事実のほうが意味が大きいのではないかと考える。最新
の軍備を即時に導入しなければならぬことは今も昔も変りはない。もちろ
んアッシリアやウラルトゥにはすでに前9世紀頃には騎兵は存在していた。し
かし、川又正智氏は次のような興味深い点を指摘している。⁽²¹⁾ アッシリアのレリ
ーフを観察すると、前9世紀の騎兵は2人1組で、2頭の馬が併走し、1人が
弓を引くとき、両手を放すのでもう1人がその馬をおさえてやるのである。と
ころが、前7世紀になると弓射手は1人で、脚を前方に伸ばし、安定して弓を
射ている。この違いは明らかである。前9世紀に騎兵は存在しているが、本格
的に導入されたのは前7世紀に入ってからのことになる。導入とは何か、それ
は模倣に他ならない。意味のあることもないものも一斉に導入せざるをえない。
あるいはそれほどショックが大きかったのかもしれない。たぶん馬面に関して
も同じであろう。スキタイの馬面を模倣したのではないだろうか。同様のこと
が漢代の中国にも見られる。匈奴に完成された騎兵隊を見せつけられた漢は屈
辱的外交を続けながらも、敵の戦法を習得し、ついには匈奴をゴビ砂漠の北へ
追いつめたのであるが、この漢代の馬面がスキタイの馬面に類似している点は
早くから指摘されてきたところである。⁽²²⁾ 実際、西アジアの前7世紀の馬面は総
体として細長く、特に(f)、(g)はスキタイの金製馬面(a)、(b)と、それまでの西ア

ジアのどの馬面よりも形態的に類似している。そこで前7世紀の西アジアの馬面をスキタイのものに影響を受けつつ、これまでの伝統を活かし、両者をうまくあわせたものと考えたい。

この場合、筆者は次の2点を前提にしている。1：残存していないが、スキタイは前7世紀以前に、木製、骨角製もしくは皮革製の馬面を用いていた。2：前4世紀に見られるスキタイの馬面はその先行形態を継承して作られている。これに対し、スキタイの馬面は前4世紀頃のものしか認められないのであるから、むしろスキタイの馬面は西アジアの馬面の形態を模して作られたと考えるのが自然ではないかという意見は当然出て来るであろう。実際、西アジアと形態的に類似しているスキタイのものは金製品で、いかにもオリエントの文化に気触れているという感は拭えない。しかし、スキタイの(b)馬面と(c)の魚形馬面は展覧会⁽²³⁾で実見したが、大変薄く、このままで用いることはできない。周辺部は折り返されており、明らかに別の材質でできた本体に張り合わされていたものである。その本体はすでに腐って、残存していないということになる。わざわざ異なる2種類の材質を用いて馬面を作っているのである。これはスキタイでは馬面の材質として、金属に先行して、有機質が用いられていたことを示すのではないだろうか。そうならば、ある程度古くから馬面が存在していたはずである。すでに朽ち果て遺物としては現存しないが、スキタイが前5世紀以前にも馬面を用いていた可能性は十分ある。さらに、形態的に類似する前7世紀の西アジアの馬面(f)、(g)とスキタイの馬面(a)、(b)の大きさに注目して頂きたい。すでに指摘したようにスキタイの馬面は額から鼻梁部にかけての部分に装着するのに十分の大きさを持っている。そしてこれ程の大きさがあって初めて、細長い形態、そして中央部の左右に張り出す部分が意味を持つことはすでに指摘したとおりである。しかしながら西アジアの馬面(f)、(g)の場合、長さは25cm程度と意味をなすには小さい。またこのような左右に張り出し部を持った馬面、もしくは張り出し部へ至る過程を追えるような先行形態はそれまでの西アジアには見られない。もし西アジアからスキタイへ形態的影響を与えたとするならば、奇妙な現象である。むしろスキタイの方がオリジナルで、西アジアへ形態的影響を与えたと考えるのが自然ではないだろうか。繰り返して述べるが、筆者は馬面が北アジアで発生したと主張しているわけではなく、スキタイ系遊牧民族も前7世紀以前に馬面を用いていて、これが西アジアの馬面に形態的影響

を与えたのではないかと考えているにすぎない。⁽²⁴⁾

前7世紀の馬面がスキタイのものを模倣しているならば、キプロス出土例と他の馬面とに大きさの違いがあるのはなぜか。筆者は受け入れ方に違いがあるためと考えている。たとえば馬面を盛んに用いていたウラルトゥでは、装着想像図(図6)に見られるように、馬面を額部に取り付けるという伝統が色濃く残っていた結果、形態は類似するが、大きさは異なるといった折衷的な馬面が出現したと考えられる。当然ババジャン出土例はウラルトゥの系統に属することになる。これに対し、それまで馬面を用いてこ

図6 装着想像図

なかったキプロスでは、かなり忠実にスキタイ系遊牧民族の馬面を模倣したのではないだろうか。形態、長さ、そして装着位置もほぼ一致する。前7世紀初頭にはスキタイ馬面と同様の、有機質でできた本体に薄い金板を張り合わせた馬面も現われているのである。レリーフに描かれている馬面らしきものしか認められないアッシリアの場合、その大きさは図像における比率から判断するしかない。騎馬像に描かれているものは、その長さや装着位置から判断して、ある程度忠実にスキタイ馬面を模倣して作られていると考えられる。たとえ単なる房飾りであっても、こうしたものを装着するようになったこと自体がスキタイの影響ではないだろうか。また前7世紀に入ると、馬面を用いてこなかったアッシリアやキプロスに馬面が出現するようになることから、この時期に西アジアで馬面が普及したことがわかる。これはスキタイ騎兵を一斉に模倣したとする筆者の考えと矛盾しない。そしてこの現象に西アジア諸国の慌て振りが窺えないだろうか。

おわりに

現存する遺物では年代的に西アジアのほうが古く、依然西アジアからスキタイへ馬面が導入されたという仮説は有効であろう。しかし現存する遺物がすべてではない。逆にスキタイからの影響という可能性もあることを指摘するだけでも意味があるのではないかと考え、小論をまとめた次第である。先学の方々

からのご叱正を仰ぎたい。

注

- (1) 巽善信「天理参考館蔵ウラルトゥの青銅製馬面をめぐる」『オリエント』第34巻1号, 1991年。
- (2) 巽善信「アジアの馬面」『天理参考館報』第5号, 1992年。
- (3) The Israel Museum, *Urartu—A Metalworking Center in the First Millennium B. C. E.*, Jerusalem, 1991.
- (4) Schauensee, M. and Dyson, R. H., “Hasanlu Horse Trappings and Assyrian Reliefs”, *Essays on Near Eastern Art and Archaeology in Honor of C. K. Wilkinson*, New York, 1983.
- (5) Goff, C., “Excavations at Baba Jan, 1967: Second Preliminary Report”, *Iran* Vol. VII, 1969.
- (6) Karageorghis, V., *Excavations in the Necropolis of Salamis* I, II, III, IV, Cyprus, 1967, 1970, 1973, 1974.
- (7) 巽善信「天理参考館所蔵ルリスタンの青銅製馬面」『天理参考館報』第4号, 1991年。
- (8) Özgen, E., “The Urartian Chariot Reconsider: II Archaeological Evidence, 9th–7th centuries B. C.”, *Anatolica*, Bd. XI, 1984, p. 97.
- (9) Moorey, P. R. S., *Catalogue of the Ancient Persian Bronzes in the Ashmolean Museum*, London, 1971, p. 138.
- (10) ギルシュマン, ロマン『古代イランの美術 I』, 新潮社, 1966年, 98~125頁。
- (11) Özgen, E., *op. cit.*, pp. 97–98.
- (12) Özgen, E., *op. cit.*, p. 97.
- Özgüç, T., “Excavations at Altintepe”, *Belleten*, Ciet 25, 1961.
- (13) Özgen, E., *op. cit.*, p. 98.
- (14) Sevin, V., “A Comment on the Assyrian and Urartian Horse Trappings”, *Anadolu Arastirmalari*, Vol. VI, 1978, p. 126.
- (15) 『スキタイとシルクロード美術展』日本経済新聞, 1969年; 『スキタイ黄金美術展』日本放送協会, 1992年; Rudenko, S. I., *Frozen Toms of Siberia—the Pazyryk Burials of Iron Ages Horsemen*, California, 1970; Minns, E. H., *Scythians and Greeks*, London, 1943.
- (16) E. H. Minns, *op. cit.*
- (17) ヘロドトス(松平千秋訳)『歴史』(中), 岩波書店, 1972年, 13頁。
- (18) 当然, アッシリア軍の発展過程を追う必要はあり, 今後の課題としたい。
- (19) Medvedskaya, I., “Who destroyed Hasanlu IV?” *Iran*, Vol. XX VI, 1988, pp. 2–8.

(20) 馬面は攻撃から馬を守るために考案されたという考え方に筆者は疑問を持っている。馬を攻撃するなら、幾つかの弱い個所を狙うであろうし、なにも額部に限らない。またたとえ有効であったとしても、防具にしてはあまりにも小さすぎるものが、西アジアに限らず、北アジアでも中国でも多数見られる。あるいは何を馬面と呼ぶのか再定義の必要があるのかもしれない。もちろん、馬を守るために何らかの防具が生み出される必要性はあったとする考えも理解はできる。しかしその場合、優れて機能的な形態へと発展するのではないだろうか。例えば、ハッサナルの焼失建物Ⅱ(ⅣB層)より青銅製の馬冑が出土している。今のところこの時期では唯一の実物ではあるが、今後の丹念な調査が類例、もしくはこれに関連する遺物を増やして行く可能性はある。ところで馬面の場合、そうした方向で発展した形跡は見受けられず、むしろ装飾的である点で終始一貫している。これはそもそも馬面の起源そのものの再考を要することを示しているのではないか。

これを考える上で、興味深い民俗例をニューギニアで調査されている天理参考館学芸員紙村徹氏よりご教示いただいた。ニューギニアにおける部族間の戦闘では、対峙した状態でまず自分たちの祖霊神を刻んだ無数の大きな盾を互いに威嚇するように前に突き出す。しばらくこれが続き、ようやく戦闘が始まるのである。紙村氏によると、人と人との戦いは同時に神と神の戦いであり、この盾の行為は神々の戦いを示していると言う。つまり戦いは神と人間の合力で行なわれるのである。興味深い指摘は、突き詰めて言えば敗北すれば自分たちの神に力が足りなかったのだと彼らが考えている点である。戦争を現代人はかなり機能的で、現実的・非幻想的な行為と考えているが、はたして古代においても同様であったか否かわからない。馬面の背景にニューギニア民俗例とまったく同じようなことを連想するのは問題かもしれないが、何らかの幻想・観念的なものがあったと考えるのは行き過ぎた類推とも思えない。盾は防具であり、ニューギニアの場合も大きく十分実用的である。しかし、馬面は既に述べたようになり小さいものもあり、額部に付けることでなにがしかのことを象徴していたとも思える。その意味で馬面は盾よりさらに観念的なものを表出するものであったのではないだろうか。馬面に神々や聖獣、聖樹が好んで描かれている点や、特に北アジアの出土例には儀礼的な要素が強くある点などを考えれば、防具と考えるよりのことを獲ているように思えるのだが。

Littauer, M. A. and Crouwel, J. H., "Ancient Iranian Horse Helmets?", *Iranica Antiqua*, Vol. XIX, 1984.

(21) 川又正智『ウマ駆ける古代アジア』講談社、1994年、163～165頁。

(22) それまでのものが全く消え、全く異なるものが出現することは考えられない。それまでの伝統的なものがあって、その時々流行や影響を受けて形態が変容、変形すると見るのが自然であろう。したがってそれまでの中国の馬面が消え去り、スキタイの馬面と全く同じものが出現したわけではない。類似性を指摘されてきたツィンバルカ出土の金製女神紋馬面と漢代の馬面においても、祖形として馬の頭部を象形したそ

れまでの中国的な馬面があり、それがツィンバルカ出土例に見られるようなスキタイ系騎馬民族の馬面に影響を受けて形態変化をなしたと考えられる。類似した形態であるが、細かい部分での形態的な特徴に中国的な解釈が見られ、単なる模倣でないことがわかる。このことは西アジアにおいても同様であろう。

相場隆「楽浪古墳出土馬面考—とくにツィンバルカ古墳出土の馬面との関連について」『ミュージアム』201号, 1967年。

(23) 「スキタイ黄金美術展」が京都文化博物館では1992年9月22日から10月25日まで開催された。

(24) 注(22)参照。

挿図出典

図1 The Israel Museum, *op. cit.*

Barnett, R. D., *A Catalogue of the Nimrud Ivories with other examples of Ancient Near Eastern Ivories, in the British Museum*, London, 1957.

図2 Goff, C., *op. cit.*

Özgen, E., *op. cit.*

Karageorghis, V., *op. cit.*

図3 Barnett, R. D., *Assyrian Palace Reliefs*, London.

図4 前掲注(14)文献の図版よりトレース。

図5 Rudenko, S. I., *op. cit.*

図6 Özgen, E., *op. cit.*